



毒吐く

ゆずたちばな

父は個性的で自立心旺盛な人だった。母は父より個性的で教育熱心だった。子供の頃の辛かった記憶といえば“躰”として浴槽に沈められる事位だったか。その他には多分普通に育てられたんだと思ってる。

ずるい賢い子供だったから“悪い事をして”家から追い出された時は、近所の公園に出かけて、ほとぼりが冷めるまでブラブラしていた。

すると友達のお母さんが

「ごめんなさい”すればきっと許してくれるよ...”

と言いながらお菓子をくれた。

母の教育方針で“お砂糖”を使った食べモノは、口にはいけない決まりになっていたの、見つからないように誰も来ない階段下の自転車置き場の隅で隠れて食べた。

甘いものに飢えていた俺には最高の贅沢だったけれど、上の学校に行けなかったのは、これが原因かもな。

俺には年子の妹がいたが、中学二年の夏、マンションの手摺りから落ちて死んだ。自殺だった。

原因は知る由もなかったが噂では、同級生の家に泊まりに行つて“いたずら”されたらしい。

もっとも“いたずら”なら幼少期に教育の一環で入れられた『いきいき元気村』では日常茶飯事だったから、

噂なんてものは当てにならないもんだ。

この場所に店を構えたのは、実家から近いのと幼馴染が多いという理由だった。

気心の知れた客と“拘りのないメニュー”を並べるだけなのに客足が途絶えない。

マンモス団地なのに他に飲食店がないのが幸いしている。

事業に成功した両親が、税金対策として持った店だから、僕が本当の意味で自立を望まない限り安泰である。

本当に出来る両親をもった俺は幸せモノだ。

おっと、おしゃべりをしてる間にお客様がお出でだ。接客は嫌いじゃないんだ。意外だろ？

じゃ、仕事に戻るとするよ。またな。